

次期学習指導要領を読む ② 資質・能力ベースの学年目標

8月の終わり、中教審の教育課程部会において「次期学習指導要領に向けたこれまでの審議のまとめ(案)」が提示されました。そこからは、各教科等指導の本質に関わる「見方・考え方」の明確化、資質・能力を育成する教科等ならではの問題解決の過程の明示、さらには教科等の特性に応じたアクティブ・ラーニング～主体的・対話的で深い学び～のとらえなどが明確に打ち出されるなど、学習指導要領の本則の策定の方向性が確認できます。今月はその「審議のまとめ(案)」から、資質・能力ベースの学年目標について考えながら、これからの算数の学びづくりの在り方を見つめてみたいと思います。

「審議のまとめ(案)」に示された総括目標からは「数学的な見方・考え方を働かせ、算数の学習を生活や学習に活用するなどの数学的活動を通して、数学的に考える資質・能力を育成する。」と、これからの算数・数学教育が資質・能力ベースで展開していくことが読み取れます。このことから、今後、明らかになってくる学習指導要領においては、当然のことながら学年目標も資質・能力ベースで示されてくると想定されます。

法的に拘束力をもつようになった昭和33年以降の学習指導要領では、本則には指導内容を中心に示し、学習活動やそれによって育成される資質・能力等の記載は限られてきました。学習指導要領に示されたことについてはそれを目指すことが前提になるため、方法を規定することを避けたり、資質・能力育成という様々な解釈が生じるものを位置付けることが難しかったりすることがその要因とされてきました。しかし、今回は総括目標に資質・能力が前面に打ち出されていることから、これまでの学習指導要領の守備範囲とは異なることは誰もが納得できるのではないかと思います。

例えば、現行の学習指導要領の5年の学年目標(図形)は「平面図形についての理解を深めるとともに、角柱などの立体図形について理解できるようにする。」と内容ベースで示されています。もちろん、「理解」の意味する範囲の解釈によっては、そこに算数・数学らしい見方・考え方の理解を含むとも考えられますが、「内容の理解」に留まるのが一般的な解釈です。図形学習での学びを支える「数学的な見方・考え方」や学びを通して身に付ける「数学的に考える資質・能力」を盛り込んだ目標設定が期待されているわけで、私たちがそのイメージが持てるかどうか、今回の改訂の成否の鍵を握っているように感じています。新しい基準には、算数・数学固有の知識・技能を踏まえた上で、当該学年までに育成してきた「数学的な見方・考え方」を働かせながら、算数・数学ならではの思考・判断・表現する力が盛り込まれることが求められるわけで、領域の特性を踏まえた上での学年の発達に応じた分析が必要になってきます。年明けには公表される本則にどのような目標が設定されていくのかをただ待っているのではなく、それらを今から想起しながら授業改善の方向性を見つめていくことが大切だと感じています。

「合同な図形や角柱などの立体図形の性質を理解し、それをを用いて基本図形についての理解を深めるとともに、図形の構成要素の位置関係や図形の相互関係に着目して論理的かつ統合的に考えたり、事象に図形の性質を活用したりする能力を養う。」 (2016/09/07)